

情報社会における子供とのコミュニケーション： 「双方向性」の意味を問い直す

田中 順子

1 目的

本論文では、情報社会における子供とのコミュニケーションについて、双方向性の重要さという観点から考察する。

コミュニケーションは、家族、友人とい個人的世界から、社会、さらに国家間の外交へとその舞台を広げていく。人間は、生まれてから一人前と言われるまでに、約 20 年の月日を要する。この間に、言語を習得し、知識を身につけ、文化を創造していく力を身につけていく。人間は社会的動物であり、その諸活動の目的は、個体の維持だけではなく、大勢の人間が社会を形成し、文化を継承していくことにある。そのために不可欠な要因がコミュニケーションなのである。

エドワード・ホールが、その著書『かくれた次元』(1970)の中で、「文化は、多くのレベルにわたるコミュニケーションの膨大な複合体である」と語っているように、世界は、さまざまな規模とレベルのコミュニケーションで成り立っている。そして、そのコミュニケーションの集合体の周りを、たくさんの情報やメッセージが飛び交っている。社会に流通する情報やメッセージが増大すればするほど、それらを吟味し、取舍選択し、読み解きながらコミュニケーションを遂行する必要がある。その際のキーワードは「双方向性」である。しかし、それはインターネットなどによって物理的な双方向性の送受信が担保されるようなことでは決してない。そのような話は本論文の趣旨ではない。ここで言う双方向性とは、「自分と他者との相互作用、相互の関わり」とい観点である。本論文では、主として子供たちとのコミュニケーションという領域について、情報社会における双方向性の意味について論じていきたい。

最近よく耳にする「キレる(切れる)」という状態は、相手との意思疎通が遮断された「双方向性」の不在を意味する。1998年1月28日、栃木県黒磯市の中学校で、1年生の男子が、遅刻などを注意した女性教師をバタフライナイフで刺殺するとい事件が起きた。ここには、コミュニケーションにおける「双方向性」の欠如と、当時テレビドラマで人気を集めていたバタフライナイフを、危険度、自分の立場、場所を考えずに携帯し使用したという情報と自分の「双方向性」の欠如が見られる。

人とのコミュニケーション、情報の有益化のための「双方向性」について改めて検証する。

2 コミュニケーションのはじまり

まずコミュニケーションは、いつ、いかなる形で始まるのか。

一人ではコミュニケーションは成り立たない。他者の存在があって、初めて成り立つものである。コミュニケーションが始まるのは、人が初めて自分以外の他者と遭遇するとき、つまり「誕生」のときであるが、これは「出生」あるいは「分娩」のときという意味ではない。それ以前から、すでにひとつのコミュニケーションが始まっている。

2.1 胎児は聴いている

母と子のコミュニケーションは、胎児のときから始まっている。胎児の様子を超音波撮影で見ることが可能になってから、胎児は母親のお腹の中で、外部の刺激、音や光の影響を受けて活発に動いていることがわかった。

胎児が外部の音が聴こえるようになる過程を図表2-1にまとめてみた。

図表2-1 聴こえの現状

時期	状態
妊娠2ヶ月の終わり	聴器である外耳、内耳がほぼできあがる
妊娠6～7ヶ月	実際にははっきり聞こえるようになる

報告によると、妊娠2ヶ月の終わりには、聴器である外耳、内耳がほぼできあがり、妊娠6～7ヶ月で実際にははっきり聞こえるようになる。胎児が聴き取れる音域は、16～500ヘルツ。女性の普通の音声は220～295ヘルツなので、母親の話し声はよく聞こえる。7ヶ月を過ぎるころ突然大きな音をたてると、お腹の胎児も両腕を広げて抱きつこうとする「モロー反応」に似た動きをする。外部の刺激に反応しているのだ。このとき、胎児の心臓の打ち方も速くなる。母親の声が胎児にとって特別である理由は、母親の声は外部から伝わるだけでなく、声の振動が直接、声帯から体の内部を伝わって子宮まで届くので、外部の雑音とは区別される点にある。

妊娠4ヶ月頃になると、胎児がお腹の中で動く胎動を母親も実際に感じるようになる。コミュニケーションの双方向性を実感する時期である。母親の語りかけや歌声を胎児は聴いている。さらに、母親の感情の変化は、内分泌系によるホルモンの化学的メッセージとして、直接胎児に伝わり影響を与える。母と子のコミュニケーションは、確実に胎児の時から始まっているのだ。このときのコミ

コミュニケーションのあり方が、出産後の母と子の絆にも大きな影響を与えるとい報告が数多くなされている。

胎児期に母親が自分を歓迎しているというメッセージを胎児が受け取ることによって、胎児は母親を信頼し、強い「母子の絆」が形成される。出生後、そのような赤ちゃんは、母親に愛着と友好を示す。その行動表出のひとつが「微笑み」であり、笑いかけの多い母親の子供は、生後 2~3 ヶ月ごろに現れるあやし笑いが早く見られるという(宮本, 1990, p.159)

2.2 赤ちゃんとのコミュニケーション

生まれたての赤ちゃんの産声が、母親の脳に信号として伝えられ、プロラクチン(催乳ホルモン)やオキシトシン(愛情ホルモン)の分泌を促す。母親は赤ちゃんの産声を聞いて、生まれたばかりのわが子を抱きとりたい、愛撫したいとい衝動がつきあがる。これも母子相互作用の一つと言われている。(高橋, 1984, p.108)

赤ちゃんは、「お腹が空いた」、「オムツがぬれた」、「体が痛い」と大きな声で泣く。その泣き声を聞いて、母親はミルクを与え、オムツを変えて世話をする。自分の発した泣き声に、誰かが何か対応してくれる。これが赤ちゃんにとっての他者との関わり、コミュニケーションである。初めのうち、母親はその泣き声の意味がわからず、思いつく様々な世話を繰り返す。しかし、赤ちゃんの望む通りの対応でなかったとき、赤ちゃんはさらに泣くことでその違いを訴える。こうした双方向のやり取りで、お互いに学習し、次第に母親は赤ちゃんの泣き声の違いを聞き分けられるようになり、的確な世話を施すことができるようになる。そして、ここにコミュニケーションを介した信頼関係が生まれる。

次に、言語の習得過程を見てみる。

図表 2-2 言語習得過程

叫声期	・出産とともに始まる
喃語期	・生後 6~8 週め
模倣期	・1 歳ごろ

言語習得の初期過程には、3段階ある。まず、出産とともに始まる「^{きょうせい}叫声期」、生後 6~8 週目ごろに、ア-ウー という母音のほかに、子音らしい音を発する「^{なんご}喃語期」、1歳ごろの「模倣期」である。(宮本, 1990, p.181)

赤ちゃんが発声をしたら、母親や近くに居る人間が何らかの反応を示すことが大切である。赤ちゃんは自分が発声すれば反応が返ってくるとい体験をすることで、コミュニケーションの形態を学習していく。

2.3 語りかけ育児

イギリスの言語治療士、サリー・ウォードは、『語りかけ」育児』(2001) (原題は『Baby Talk』)の中で、赤ちゃんが生まれたら赤ちゃんと向き合って毎日30分語りかけることを提案している。これによって言葉はもちろんのこと、知能や情動、社会性の面でも著しく発達するというのだ。彼女が何よりも注目したのは、「聞く力」と「注意を向ける力」。彼女の開発した「語りかけ」育児法は、ことばの遅れという問題を防ぐために開発されたのだが、すべての子どもの発達を促すために役に立つということが明らかになった。子供たちはにぎやかな場所では、自分に語りかけられている内容に集中できない。だから、静かな場所で、本人に向かって語りかけるのだ。押し付けるのではなく、語りかけるのである。このとき、自分に向かって語りかけられている言葉と内容以上に、その人の愛情、自分への関心を自覚する。それは、大切にされている自分、価値ある自分とい意識も同時に育むことになる。コミュニケーションが双方向である意味は、こうした内面的な意識、感情を育てることにある。

最近では、テレビに子守をさせるという人が多くなっている。テレビを見ていると言葉を覚えるという誤解もある。ある3才の男の子が、名前を聞かれると、ある証券会社の名前を繰り返すのだそうだ。ふざけているわけではなく、いつもテレビに子守をしてもらっていたので、何度も繰り返されるその言葉のみを覚えてしまったのだ。言葉の習得には、言葉のキャッチボールが欠かせない。テレビを見ていると確かに言葉を覚えるが、これは一方的なコミュニケーションであって、対話や相互作用がない。したがって、言葉の正しい発育が妨げられ、自閉的な子供すら作ってしまうという(高橋, 1984, pp.230-232)

2.4 サイレントベビー

泣いても構ってもらえず、微笑みも返してもらえなかった赤ん坊は、他者と関わることを拒絶するようになってしまう。山口県の小児科医、柳澤慧(1998)は、こうした子供たちを「サイレント・ベビー」と名づけた。言葉の遅れから診察に訪れた子供たちの多くが、身体的な問題ではなく心の問題だったとい報告である。

以下は、診察に訪れた子供たちの症状である。

(5 ヶ月の男の子)発語があまりなく喃語も少ない。表情が乏しく笑わない。母親を凝視しない。

(8 ヶ月の女の子)診察中も母親は子供に声をかけない。診察中も泣かず、表情に乏しく、活気が無い。お腹がすいたという意味表示も家では、少ない。

(3歳2ヶ月の女の子)来院の理由は発語が少ないこと。発達に異常は見られない。人の目を見ない。動きが少なく静かな子。言語発達はほぼ正常。待合室で母との会話がな。本も読んでやらない。二人が顔をあわせることも無い。

母親たちに「子供にはよく話しかけますか」と聞くと、答えは「そんな必要があるんですか?」だった。この子たちは、生まれてからずっと母親に優しく抱かれたり話しかけられたりせずに育ってきたので、言葉を発するといコミュニケーションの方法を知らなかったのである。柳澤は、母親たちに親の愛情がいかに大切かを教え、毎日の愛撫、言葉かけを指導した。早い親子は数ヶ月で治療の効果が現れ、子供は少しずつ言葉を獲得していった。

ポウルピイは、乳幼児期の不満足な人間関係によって生じた不安定感、将来において心理的圧迫を受ける事態に直面した際に、反社会的行動を引き起こしやすいという事実を多くの検証から導き出し警鐘を鳴らした。(ポウルピイ, 1966, p.3)

また、アメリカの動物学者、ハリー・F・ハーロウ博士のアカゲザルの実験は有名である。アカゲザルの子供を生まれてすぐ母ザルから引き離し、二つの人工的な「代理ママ」で育てる。一つは、針金でできた体に、胸に哺乳瓶をつけたもの。もう一つは、哺乳瓶はついていないが、やわらかい布でできたママ。赤ちゃんザルは、おなかですくと針金のママのところへ行ってミルクを飲んでしたが、成長するにつれて、布でできたママにしがみつ(時間が長くなった。そして、ゼンマイで動くマのおもちゃなどを見せると、驚いて、急いで布製のママにしがみついた。新しい部屋に入ると、布製のママが見つかるまでそわそわしていた。(高橋, 1984, p.140)

哺乳瓶がついている有用なママよりも、安らぎを与えてくれる布製のママの存在が、情緒面の発育には不可欠だと実験結果は語っている。

また、西ドイツで戦争孤児のための多くの孤児院を政府がつくり子供たちを育てたところ、隣り合わせた2つの孤児院で、子供たちの成長に大きな変化が見られた。1つの孤児院では、やさしい院長が子供たちを豊かな愛情で包んで育てた。ところが、隣の孤児院の院長は厳しい人で、しょっちゅう子供たちをガミガミ叱りつけていた。両方の孤児院とも、食料は子供一人当たり1くらときちんと割り当てられていたので、栄養の点ではまったく差がなかったはずなのに、やさしい院長の孤児院の子供たちのほうが、きびしい院長の孤児院よりも、体の発達がよかったのである。そこで、院長を取り替えてみると、半年ぐらいで、発育の様子が逆転した。(高橋, 1984, p.194)

ポウルビィも、母性的教育を喪失した子供の発達は例外なく遅れる(身体的、知能的、社会的に)し、肉体的にも精神的にも不健康の徴候を示す。』(ポウルビィ, 1966, p.6)と報告しているように、愛情』は子供の発育にとって、コミュニケーションの『双方向性』を担う最も重要なファクターである。核家族化が定着し、メディア情報を一方向的に受信しがちな情報社会であるからこそ、愛情をベースとした幼児期、児童期の双方向的コミュニケーションの重要性が十分に認識される必要がある。

2.5 コミュニケーションを学ぶ

胎児に始まり乳幼児期、そして児童期において双方向的コミュニケーションがいかに大切かを考察してきたが、長じるにしたがって、人とのコミュニケーションはさらにその重要さと複雑さを増す。

エドワード・ホールは、コミュニケーションの中で大切なのは、精神的、物理的距離感の知覚であり、その後の対応であると述べている。(ホール, 1970, pp.160-181)

個人、友人の枠を越え、コミュニケーションは社会、世界へと広がっていく。好き嫌いを超えたコミュニケーションにおいては、相手を理解し、共通の目的を達成するために協力し合うという高度なテクニックが要求される。

ここで、コミュニケーションの方法を、後天的に習得してもらおうといふ試みをいくつか紹介する。(一部、大人を対象とした内容を含むが、子供とのコミュニケーションを考える上でも参考になると思われる。)

2.5.1 『セカンドステップ』プログラム

『セカンドステップ』プログラムは、米国ワシントン州にある NPO 法人こどものための委員会 (Committee for Children) (1978 年設立) によって開発された。このプログラムでは、子供が健全な対人関係を育み、さまざまな場面で問題解決力を養っていけるようレッスンが計画されている。

1980 年代当時の米国では、10～21 歳の 36% が犯罪歴をもち、15～24 歳の自殺者が急増していた。社会や家庭のストレスの中で育った子供たちの特徴として、攻撃的で、周囲を困惑させる言動をとる、思いついたことにパッと飛びつく傾向がある、否定的言動をとる、罪悪感が弱い、といった点が目立った。こうした状況を改善するために、こどもの中の暴力性・攻撃性を『減少』させるのではなく、対人関係能力・問題解決能力を『増大』させることを目的にしてプログラムが組み立てられた。指示的・禁止的な接し方ではなく、『いっしょに考えていく』接し方によって、このプログラムは成り立っている。

2.5.2 「コーチング」

「コーチング」は、相手の能力を最大限に引き出し、自発的な行動を促進するコミュニケーション・スキルである。その人が必要とする答えは、その人の中にあるというポリシーのもとに、コミュニケーションによってその答えを導き出す手助けをし、自発的行動を促す双方向コミュニケーションである。コーチは、コミュニケーションを交わすことによって、相手が実現したいゴールを明確にし、短時間で達成できるようにサポートする。そして、行動を継続していけるようにフォローする。こうしたコーチングは、企業における部下の管理、勤労意欲の増進に多く使われてきたが、生活に身近なコミュニケーションに、このテクニックを生かす人々も増えている。ポイントは、自分の答えを押し付けるのではなく、相手から引き出すことである。

2.5.3 「親業」

「親業」の研究は、親は自分のやり方の間違っているところ、自己流でない子育てについてどこで学ばばいいのだろうか」といふ問いかけから生まれた。この中では、「寄り添う会話が尊重される。子供が自分の問題を自分で解決するように導いていく会話の方法を親が学ぶのである。親は、親子間のコミュニケーションの道を一方通行ではなく双方向通行にし、親が日々評価を下さずに子供の話に耳を傾け、自分の感情を素直に伝えるコミュニケーションの技術を身につけるよう指導される。相手との関係に非受容を持ち込まず、「受容のこぼれ」が相手の心に伝わるように話すことが大切であり、受容のもたらす効果の中で一番大切なのは、自分は愛されていると子供が思うその内的な感情であると、トマス・ゴードン (1998) は訴える。

2.6 双方向性拒否の弊害

コミュニケーションは自分と他人とを結びつけ、そこから何かを生み出して行く創造的な営みである。しかし、長時間自分の世界に閉じこもる形でゲームに興じている子供たちの姿は、他人とのコミュニケーションを拒絶しているように見える。彼らの内部で何が起きているのだろうか。森昭雄は『ゲーム脳の恐怖』(2002)の中で、彼らの脳内で進行している危機に対して警鐘を鳴らす。

森の研究の結果、テレビゲームを長期間行っている人の脳波が、重い痴呆の人の脳波にたいへん類似していることがわかった。波のレベルと波のレベルが完全に重なってしまい、さらに深刻な状態では、波がほとんど出現なくなるという前頭葉の中でも前側に位置している前頭前野の機能が低下すると、判断力などがなくなり、状況や周囲に配慮しない行動を取るようになってくる。自分勝手な態度や非常識な言葉遣い、暴力的行為などがその典型的な例という。また無気力となることもわかっている。

「ゲーム脳人間タイプ」は、前頭前野の脳活動が消失したといっても過言ではないほど低下してしまった人たちで、小学校低学年あるいは幼稚園児から大学生になるまで、週4~6回、1日2~7時間テレビゲームを行っていた人たちと定義づけられている。森は、こうしたタイプの人たちが、人間性を失い、人間としての社会生活を営むことができなくなるのではないかと懸念している。そして、その対応策として、コミュニケーションの手段としての言葉を習得するために、幼児期の言葉の習得、児童期の文字の読み書き、童話、伝記、神話などを読んで聞かせ、心の成長を大切にすることを提言している。同時に、スキンシップと手をとって教えることも大切で、子供の頃にいろいろな遊びを行い、多くの経験をすることが前頭前野を鍛えることになるとも述べている。

コミュニケーションは、目に見えないお互いの心をつなぐための大切な手段であり方法である。テレビゲームとのやりとりとは違う生身の人間同士の双方向コミュニケーションの価値を認識し、そのスキルを習得することは、情報社会に生きる子供たちにとって大切な鍵である。

3 メディア情報の影響

前述のバタフライナイフを持ち歩いていた栃木県の中学生が教師を刺殺した事件、2002年に、大食い競争の番組を真似た中学二年生がパンをのどに詰まらせ死亡した事件など、テレビ番組の影響による事件、事故は後をたたない。

2004年2月、社団法人日本小児科医会は、『子どもとメディア』の問題に対する提言』を出し、二つの懸念を表明した。一つは、メディアとの接触の低年齢化、長時間化。もう一つは、乳幼児期から一部の暴力的な内容に触れてしまう実情である。乳幼児期からメディア漬けの生活を送るとコミュニケーション能力が欠如し、心身の発達にも影響を及ぼすと警鐘を鳴らした。

読売新聞が行ったメディアと暴力に関わる調査によると、現実とフィクションの区別をつけるのは幼児の発達段階では難しく、暴力的な映像を見続けると、必要以上に恐怖感を持つ子が出るという結果が出ている。大人は、自分の中である程度の常識や価値観が確立しているので、その中で情報を無意識のうちに取舍選択している。しかし、子供たちは、情報をそのまま現実として自分の日常の中に取り入れてしまう危険がある。読売新聞の調査に対して、日立家庭教育研究所の土谷みち子氏は、ニュースなどのショッキングな内容や映像を子供たちが見る場合は、大人が、状況や背景を説明したり言葉を添えたりすることが大切であると指摘する。(読売新聞 2001. 9.14 朝刊 米同時テロの映像 子供への影響 専門家懸念)

佐々木輝美は『メディアと暴力』(1996)の中で、メディアによる暴力描写は人々に悪い影響を与えていると言わざるを得ないと結論づけ、4つの理論を紹介している。第一はメディア暴力の「カタルシス理論」であり、人々が日常生活において持っているフラストレーションを、他の人の攻撃行動に代理参加することで解消するというもの。暴力描写によって視聴者がすっきりすることを意味する。

第二は「脱感作理論」で、人々がメディア暴力に多く接触した場合、暴力に対する感覚が麻痺してしまうというもの。第三は「カルティベーション理論」で、暴力や犯罪が多く描かれているテレビに多く接触した場合、テレビ世界と現実の混同が生じ、必要以上に暴力や犯罪に対して恐怖心をもつようになるというもの。第四は「観察学習理論」で、メディア暴力に接すると描写された場面を学習し、ある場面ではそれを実行するというものである。(佐々木, 1996, pp.39-86)

子供のときからマス・メディアで示されるものを手本として無条件に受け容れる傾向性と習慣が、メディア暴力の問題を深刻にしている。情報社会というものが、メディア情報、特にマス・メディアの情報に多く依存する社会である以上、情報発信者であるメディア自体が重大な責任を負っていることを、メディア人が自覚することが最も重要である。これはジャーナリズム教育やメディア倫理の問題である。さらに、視聴者がメディアに対する認識を改め、メディア情報を一方的に受け容れる立場から、周りの人々との人的コミュニケーションや多数の情報との比較を重視し、その中で情報を有効活用していく姿勢が大切である。これは主にメディア・リテラシーの問題である。子供たちに対しては、親や地域の人々がより信頼性の高い情報源となって、子供と多く関わる機会を創出し、さまざまな問題解決の方法や、生きていくうえでの生きた手本を示すことが必要である。

4 結び

情報社会を成功させるキーワードは、「双方向コミュニケーション」である。本当の意味での双方向コミュニケーションとは、自分と他者との相互作用、相互の関わり合いのことである。この双方向の関わり合いは、人間としての最初の瞬間から始まり、成長していく全てのプロセスにおいて欠くことのできない、人間の本来のあり方である。社会の規模が巨大化し、相互の関係性が複雑化した情報社会では、相互の関わり合いという視点がますます重要である。一人の人間の行動可能性は限られているが、コミュニケーションによって人が結びつくとき、物理的な $1 + 1 = 2$ 以上の効果を生み出し、大きな仕事や多様な活動が可能となる。一人の人間の限界を超え、文字通り無限の可能性を引き出す。本論文では、情報社会における子供とのコミュニケーションを中心に論じてきたが、より広くコミュニケーションの双方向性がもたらす可能性について、今後さらに研究を進めていくつもりである。

謝辞

本論文の投稿の機会を下さった大妻女子大学の関口礼子先生、本論文の執筆にあたり助言を頂いた東京大学の竹之内禎氏に、末尾ながら、御礼申し上げます。

引用文献

- エドワード・ホール (1970). 日高敏隆, 佐藤信行訳. 『かくれた次元』. 東京: みすず書房.
- サリー・ウォード(2001). 榎朝子訳. 『語りかけ』育児』. 東京: 小学館.
- 佐々木輝美 (1996). 『メディアと暴力』. 東京: 勁草書房.
- ジヨン・ボウルビイ (1967). 黒田実郎訳. 『乳幼児の精神衛生』. 東京: 岩崎学術出版社.
- 菅谷明子 (2000). 『メディア・リテラシー』. 東京: 岩波新書.
- 『セカンドステップ』プログラム http://www.cfc-j.org/second_step.html access date: 2004/10/27.
- 高橋悦二郎 (1984). 『胎児からのメッセージ』. 東京: 二見書房.
- トマス・ゴードン (1998). 近藤千恵訳. 『親業』. 東京: 大和書房.
- 日本小児科医会 (2002). 『子どもとメディア』の問題に対する提言』.
<http://www5d.biglobe.ne.jp/~k-media/proposal01.pdf> access date: 2004/10/27.
- 宮本健作 (1990). 『母と子の絆』. 東京: 中公新書.
- 森昭雄 (2002). 『ゲーム脳の恐怖』. 東京: NHK出版.
- 柳澤慧 (1998). 『サイレント・ベビー』. 東京: クレスト社.
- 読売新聞 (2001). 9月14日朝刊 『米同時テロの映像 子供への影響 専門家懸念』